

# “The Snows of Kilimanjaro” と “Artist at Home”

——作家によって描かれた「作家」——

花 岡 秀

Ernest Hemingway の “The Snows of Kilimanjaro” は 1936 年に *Esquire* に、William Faulkner の “Artist at Home” は 1933 年に *Story* に発表された。両作品ともに、作家によって描かれた「作家」が主人公として登場する。それぞれの短篇が発表された時点では、Hemingway はすでに *In Our Time* (1925), *The Sun Also Rises* (1926), *Men Without Women* (1927), *A Farewell to Arms* (1929), *Death in the Afternoon* (1932), *Winner Take Nothing* (1933), さらに *Green Hills of Africa* (1935) 等を発表していたし、Faulkner の方も、*The Sound and the Fury* (1929), *As I Lay Dying* (1930), *Sanctuary* (1931), *Light in August* (1932), さらに “A Rose for Emily” をはじめとする短篇を含む *These 13* (1931) といた傑作をすでに公にしていた。つまり、二作品に登場する二人の「作家」は、すでに旺盛な創作活動から優れた作品を生み出しつつある作家によって描かれた「作家」という、読者からすればきわめて興味深い人物となっているのである。

作家としての揺るぎない位置を確保するに余りある作品をすでに公刊していたとは言え、Hemingway, Faulkner とともに、両短篇が発表された頃の実生活では、決して平穏で安定した日々を送っていたわけではない。Hemingway には、*A Farewell to Arms* 出版以降経済的にはかなりの余裕が出来たとは言え、1929 年の大恐慌以降の不況に喘ぐ暗澹たる社会、Dos Passos や Edmund Wilson といた同輩をも巻き込んでいった左翼的文学の隆盛、やがて深く闊

与することになるスペイン内乱の勃発、また、最初の妻 Hadley Richardson との離婚、続いて Pauline Pfeiffer との再婚、やがて三度目の妻となる Martha Gellhorn との恋愛といった重い現実がのしかかっていた。

Faulkner に目を移せば、優れた作品を矢継ぎ早に書き上げて出版を引き受けてくれる出版社を探すのにも苦勞し、出版しても売れ行きは一向に芳しくなく、唯一売れた *Sanctuary* の Modern Library edition の序文に記された、「私にとっては安っぽい思いつきで、ひとつ金儲けをしてやろうと思いついて」<sup>(1)</sup>書いた、という言葉は当時の彼の複雑な胸中を物語っている。このころ、ハリウッドとの関係が始まるが、その背後には、離婚して自由の身となったかつての恋人 Estelle との結婚にともなう逼迫する経済状態が見え隠れするのである。

これら二つの短篇に登場する二人の「作家」は、創作活動と現実生活の関わり諸相を読者に提示してくれるが、重い現実の中で生きる二人の作家を背景に据えてみると、にわかには不思議なリアリティを具えた存在として読者に迫ってくる。作家の実人生と作品を安易に結びつけようと言うのではないが、この二人の「作家」が、たとえ屈折したかたちであろうとも、Hemingway と Faulkner という現実の作家とその創作活動の一端を読者に垣間見せてくれる思いがするのである。

## I

“The Snows of Kilimanjaro”の主人公 Harry は、かつては意欲的に創作に打ち込んでいた様子が窺われるが、今では「考えることなどやめてしまい……自分の才能を鈍らせ、書こうとする意欲を弱らせ、ついにはまったく書かなくなってしまった」<sup>(2)</sup>日々を送っている。Harry は再出発を期して、「彼の人生の良き時期に最も幸福に過ごしたアフリカ」(SK 60)にやって来たが、ふとした不注意から片足が壞疽にかかってしまい、忍び寄る死の影に怯えながら、救援の飛行機を待っている。物語は三人称の視点から描かれているとは言

え Harry の意識を色濃く窺わせるもので、主として Harry と妻の Helen<sup>(3)</sup> との遣り取り、Harry のさまざまな回想および幻想から成っている。

一方、“Artist at Home” に登場する Howes は、ニューヨークで広告書きをしていたが、小説家になり、一冊の本を書き一儲けするとヴァージニアの辺鄙な山中に屋敷を購入し、今では妻と子供と一緒に世間から隔絶した生活を送っている。Howes の所には「一冊の本も一枚の絵も売れない」<sup>(4)</sup> 貧しい芸術家らしき連中が引切りなしに居候にやって来る。そこへ、ある日、若い詩人の John Blair が訪れるが、その若者は Howes の妻 Anne に恋をする。最初は John の純真さに Anne も惹かれるが、John のあまりの単純さにあきれて、Anne は夫のもとに戻る。John は雨の中で濡れそぼちながら Anne を待ったのが原因で、発熱して死んでしまう。こうした騒動の経緯の中で、夫の Howes は、その事件を素材に利用して、大した想像力を働かせることもなく物語を書き、それが大衆雑誌に掲載され、一稼ぎするという物語になっている。

ここで、さらに詳しく Harry と Howes を眺めて見なければならぬ。まず Harry であるが、なんとか「やり直すために、……修行の生活に戻り、… …魂から脂肪を削ぎ落とし」(SK 60) にアフリカまでやって来たが、壞疽にかかり、自由に動くこともままならないままに、彼は小説の素材となりそうな幾つかの回想に耽る。ブルガリアやオーストリアで過ごした冬、コンスタンティノーブル、フォーラルベルグでのスキー、ギリシア・トルコ戦争から戦後のバリ、何度も殴られた恐怖から強欲な老人を射殺した雑役の少年が働いていた牧場、第一大戦にまつわる壮絶な場面、と回想はめぐる。しかし、Harry は、それらの回想は彼が「書こうと思っていたすべての物語」(SK 70) であり、「今となっては決して書くことのない物語り」(SK 66) であるといった類のことを回想の度毎に自ら述べている。彼には「書くべきことはたくさんあった」(SK 65-66) が、実際には何一つ書いていないのである。次の一節は、Harry のこのような心境を集約した部分である。

書くことが出来るほどに理解するまでは書きためておいたことも、今と

なくては書くこともなかろう。そうなれば、書こうとして失敗することもなくなったわけだ。ひょっとすると、書くことが出来なかったのかも知れない。だから、先へ先へと延ばし、書き出すのを遅らせたのかも知れない。(SK 55)

こうした一連の回想や描写から、Harry は、素材としての適不適は別としても、「書くべきことはたくさんあった」わけで、作品の素材に事欠くような「作家」ではなかったことが窺われる。豊富な、しかも書きたいと思うような素材を抱き続けながら、それらを作品に結晶化させようとしない「作家」が浮かび上がってくる。その原因については後に詳しく触れるとしても、何よりも書こうとする意思、気力の欠如が Harry に読み取れる。Harry が直面している問題は、作家としての才能の決定的な欠陥ではない。つまり作品の創作そのものに致命的となるような才能の欠落は Harry には認め難いということである。その証拠に、忍び寄る死の恐怖から、彼は書き残したさまざまな素材にまつわる回想に耽るが、その描写部分は Hemingway 自身が *In Our Time* で個々の短篇のまえに挿入したあのインターチャプターを想起させるような、「作家」としての資質を十分に窺わせるものとなっているのである。

それに対して Howes は、一冊の本を書き一儲けし、しかも、芸術家志望の怪しげな連中に引切りなしに居候されながらも、すでに名を成した作家よろしく、今ではヴァージニアの辺鄙な山中に購入した屋敷でのんびりと暮らしている。しかし、Howes は、妻の Anne の「二週間かしら、それとも二年間だったかしら、あなた、一行も書いていない」(CS 633) という言葉からも明らかのように、現在創作活動などまったくしていない。Blair が、「今夜ぼくはあなたの奥さんとキスをしました。できることならまたしたいと思っています」(CS 637) と言うのを聞いても、「私にはその件については何も忠告出来ない」(CS 637) と呑気にパイプに火をつけている始末である。その彼が、Anne と Blair との恋愛沙汰を利用して一気に作品を書き上げるのである。

しかし、「作家」として眺めた場合、問題は Howes の方が深刻である。そ

これは、この物語が、作品の素材を何一つ持ち合わせず、目の前で起こりつつある、あるいは起こった現実の出来事を利用しなければ書けないほどまでに彼の想像力が枯渇していることを示しているからである。それどころか、詩人の Blair が書き残し、最終的には高い評価を受けることになる「メニューの裏に書きつけた一篇の詩を、自分の作品の中に入れてたい」(CS 644) とすら思ったのである。想像力の枯渇どころか剽窃までやりかねないほどの Howes の創作に対する安易な、それどころか切迫した姿勢も見え隠れする。このような Howes に認められるものは、「作家」としての才能、資質の欠如であり、Harry の場合と比較すれば、問題はかなり深刻なものとなっている。

## II

十分な素材を持ち合わせながら創作に取りかかれなかった Harry と、現実の出来事を利用しなければ作品を書けないほどに想像力が枯渇した Howes を眺めたわけであるが、さらに、この二人の「作家」を通して映し出される問題に目を移さなければならない。

Harry は、「書くこともせず、安楽で、自分が軽蔑するような人間としての日々を送り、自分の才能を鈍らせ、書こうとする意思を弱らせ、それでとうとう書けなくなってしまった」(SK 60) ののであるが、三人称の視点ではあっても彼の意識を色濃く漂わせる描写は、さらに、「彼が生活するために選んだのはペンや鉛筆ではなく、何かほかのものだった」(SK 60) と続く。そのような安逸な生活を得るために、彼は「かなり金持で、愛想がよく、理解のある」(SK 62) Helen を選んだ。彼女は、快適で安逸な生活を彼に保証してくれるだけの財力を持ち、そのうえ「とびきり素敵な女」(SK 62) である。

このような Harry を通して浮かび上がってくる問題は、作家と現実生活の問題である。作家として現実の社会の中で生活を営んでいかなければならないという厳然たる現実がある一方で、創作活動が直線的には生活の糧と結びつかず、その埋め尽くし難い断層に翻弄される Harry の姿が映し出される。生活

のより一層の安定を求め、あくせくするのが人間の日々の営みである。それは、Harry が、「新しい女と恋をすると、きまってその女は前の女よりも金持だった」(SK 60)という事実が何よりも物語っている。「ペンや鉛筆」は、Harry が望むような日々の営みを保証してくれなかったのである。このような選択をし、物質的に満たされた安易な生活を送ってきた Harry ではあるが、迫り来る死に直面しながらも、書くことが出来なかったさまざまな素材に対して馳せる回想は、創作活動と現実の狭間に苦悩する「作家」を映し出しているように思われる。

Howes にも、作家と現実生活の問題を読み取ることが出来る。芸術家(志望)の無名の若者たちに押しかけられ、一端の「作家」を気取っていても、「売れた本で車を持てるほどの余裕が出来たわけでもなく」(CS 628)、妻の恋愛沙汰を利用して書き上げた作品の原稿料で、死んだ Blair の入院料と葬式代の未払いを清算し、Anne に毛皮のコートを、自分と子供たちには冬用の下着を買った程度である。冬用の下着は、近づきつつある冬に備えて衣類を買わなければならない現実生活を窺わせる。しかし、書き上げられた原稿を見て、「そう、あなたそんなことをしてたの」(CS 645)と洩らす妻の Anne と、おそらく Howes が黙認した Anne との恋愛事件がきっかけで肺炎にかかって死んだ Blair に対する Howes の後ろめたさと気遣いも、きわめて現実的なかたちとなって現れている。冬用の下着と不自然な対照を感じさせる毛皮のコートは、現実生活の上では、物質的な欲望をそれとなく匂わせる高価で贅沢な代物であろう。また、Howes が支払った Blair の入院費と葬儀費用の未払分も、社会生活を営む人間が生と死という局面においてさえ金銭と深く結びつけられている現実を端的に集約するものである。

この二人の「作家」は、さらに女性に対する姿勢でも興味深い対照を見せてくれる。Harry は今の Helen との関係を、「彼女は新しい生活を築き、彼は以前の生活の残余を売り払った」(SK 61)結果として把握している。彼は、女性との関わりを、何を得て何を失ったかという観点から捉えようとする。ここに見られるのは、男女の関係を「得失」あるいは「契約」という基準で量る

うとする姿勢である。「心にもないことを言うようになって以来、本当のことを語るよりも嘘をつくときの方が女たちをうまく扱えた」(SK 59) し、「嘘をついたというよりも語るべき真実がなかった」Harry にとっては、女性は「彼の才能を台なしにする」(SK 60) 可能性すら孕んだ存在であった。この作品では、女性は、「作家」の創作活動とは何一つ関わりを持たない、それどころか、現実生活を送る上で、金銭や物質と深く結びついて、その活動を阻害しかねない存在として提示されていると言えよう。

一方、“Artist at Home” においては、「作家」と女性の関係は異なった局面を見せている。前述したように、妻との関係の崩壊の危険を冒してまで、Howes は妻の恋愛沙汰を黙認し、自らの創作の素材に利用するが、これは女性をも含めた現実の世界での出来事をそのまま創作の世界に取り込もうとする姿勢である。女性は「作家」の創作活動を阻害するような存在としてではなく、むしろその創作世界を構築する重要な存在として描かれている。

これら二作の短篇に登場する二人の「作家」は、微妙な差異を示しながらも、逃れようのない現実生活と深く関わりと同時に、女性に対しては、創作活動から排除しようとする Harry と、創作活動の中へ取り込もうとする Howes、とじつに興味深い対照を成している。

### III

「作家」としての Harry と Howes を検証してきたが、ここではこの二人の「作家」の描かれ方、各々の短篇の構造について触れてみたい。そこでまず注目したいのは、“The Snows of Kilimanjaro” では作品の冒頭に置かれた一節に描かれた「豹」、 “Artist at Home” では若き詩人 ‘Blair’ である。「豹」も ‘Blair’ もともに二人の「作家」を映し出す鏡のような役割を作品の中で果たしているが、当然のことながら平板な普通の鏡などではなく、複雑に屈折してはいるが鮮やかにそれぞれの「作家」の歪みを映し出すものとなっている。

「豹」は、キリマンジャロの西の頂近くに干からびて死骸となって横たわっ

ているのだが、Harry が最後の幻想で、純白に輝くキリマンジャロの頂を眼にして「自分が行こうとしているのはあそこなのだ」と思った（SK 74）、という部分から、これまで多くの研究者や批評家がこの「豹」と Harry を結びつけて冒頭の部分を解釈しようとしてきたが、それはそれなりの妥当性をもつものである。しかし問題は解釈である。「その西の頂はマサイ語で *Ngàje Ngài*（神の家）と呼ばれている」（SK 53）という描写や、これまで Hemingway が幾度となく用いてきた「雪」とか「山頂（高み）」といった幸福を表わす象徴から、この「豹」の姿に、作家としての再生を果たすべく、崇高な理想の高みへと達しようとした Harry を重ね合わせようとする立場からの解釈が一般的である。さらに、腐敗せずに凍りついた「豹」の死骸に、ここまで登り詰めてきた動機の不滅性まで読み取ろうとする研究者<sup>5)</sup>すら見られる。

しかし、重要なのはこの一節の最後の、「そんな高いところで豹が何を探し求めていたのか、誰一人として説明したものはない」（SK 53）、という文章である。すでに干からびて凍りついた死骸を見て、その一頭の「豹」が何故そのようなところへやって来たのかを説明することなど、まず不可能であろうし、また無意味ですらある。「やり直すために、……修行の生活に戻り、……魂から脂肪を削ぎ落とし」に Harry はアフリカくんだりまでやって来たが、「快適さを最小限にし……贅沢などしなかった」（SK 60）とはいえ、「金持のめす犬」（SK 59）である Helen を伴い、運転手や使用人を雇い、ここまで来ても「ウイスキー・ソーダ」（SK 63）を飲んでいる Harry の行動も論理的な説明など不可能である。とても再生を図ろうとする「作家」の姿勢とは受け取れない。しかし、Harry の自虐的な悔恨、創作活動に対する乱れる想いや悔い、現実に対する「作家」としての屈折した姿勢、苦悩は紛れもなく現実を生きる一人の人間のものとして読者に迫っていく。読者を一瞬混乱させる、生と死の狭間で Harry が見る幻想、純白のキリマンジャロの頂を越えようという幻想と安易に結びつけて、「作家」Harry の再生の軌跡を「豹」に読み取ろうとする解釈はあまりにも単純で、直線的と言わざるを得ない。それよりもむしろ、この「豹」は、「作家」Harry の複雑な思いを孕んだ、彼以外の人間に



は説明のつかないアフリカ旅行をアイロニカルに映し出す役割を果たしているように思われる。

一方、詩人 ‘Blair’ も、「作家」Howes の姿を鮮やかに映し出す役割を果たしている。老練な Howes に対して、若き詩人 ‘Blair’ は、人妻 Anne に惹かれ、一途に恋に身を委ね、その無茶がたたって、一篇の優れた詩を残し死んでしまう。‘Blair’ は純真であるがゆえに、Howes にも隠し立てを出来ず、最後には Anne をも怯ませてしまう。‘Blair’ の生きる世界は、自らの想いや情熱を言葉に凝縮する詩作の世界で、現実の常識や規範、ましてや金銭などとは無縁である独自の世界である。‘Blair’ は、妻の現実の恋愛沙汰を利用し、「最もおもしろいゴシップ原稿」(CS 644) である大衆小説を書き上げる Howes の、現実と解き放ち難く絡み合った世界を一層際立たせる役割を果たしている。

短篇の構造も、作家が「作家」を描く際の問題を示唆しているように思われる。“The Snows of Kilimanjaro”は、現に進行している出来事、すなわち Harry と Helen のアフリカ旅行を描写する部分と、忍び寄る死を前にして Harry がいつかは書きたいと思いためてきた過去の出来事を回想する部分、そして生死の境で浮かべる Harry の幻想を描いた箇所から成っている。視点について言えば、この作品は、三人称の全知の視点から描かれているが、実際にその意識の中まで読者に開示されるのは主として「作家」Harry の内面で、制限付きの全知の視点で語られていると言ってよい。

作品全体を通して、まず視覚的に読者の眼にとまる構造は、Harry の回想部分がすべてイタリック体になっている点である。しかし、事実を描写した部分はもちろんのこと、このイタリック体の部分も紛れもなく Hemingway の文体そのものである。当然と言えばそれまでであるが、わざわざ活字を変更し、Harry に、「ぼくは書いていたんだ……しかし疲れたよ」(SK 72) とまで語らせているのであるから<sup>(6)</sup>、読者としてはいささかなりとも「作家」Harry の作家としての「アイデンティティ」の片鱗でも覗いてみたいような気がする。さらに言えば、Harry の一人称の「語り」を聞いてみたい、あるいは彼の「文章」を読んでみたい気持ちに駆られるのである。しかし、前述したよう

に、読者は無意識のうちに、*In Our Time* のインターチャプターさながらのその部分に Harry ではなく Hemingway を見出すのではなからうか。書くことが出来なかった「作家」の回想部分を、Hemingway はなんと自らの文体で描写しているわけである。

さらに、構造の上から、読者を困惑させる部分がある。Harry の幻想を描写した部分である。物語を読み進んできた読者は、「朝になっていた……」(SK 73) という文章で始まるこの部分を、現実の出来事として読み進む。しかし、闇の中から聞こえる奇妙なハイエナの鳴き声で目を覚まし、Harry の異変に気づいた Helen が上げる叫び声で、読者は初めてその部分が Harry の幻想を描いたものであることを知る。読者は「Hemingway に一杯喰わされる」<sup>(7)</sup>わけである。Harry の回想の部分はイタリック体を用いながら、前後に一行のスペースを取っているだけで、この部分には用いていない。この幻想の、物語中の時間の経過の中での位置を優先させたのであろうが、読者が「一杯喰わされる」最大の理由は、やはり文体である。死の直前に Harry が垣間見る、もっとも個人的な幻想でさえも、実際に起こっている事実を描写している部分と同じ文体で描いているのである。ここでも「作家」Harry の意識に色濃く Hemingway の影が落ちていると言えよう。苦悩する「作家」としてその内面にまで分け入って描いてきたが故に、Harry の死の直前の意識に、読者がさまざまな解釈を試みたくなるほどの意味を描き込みたいという意識が Hemingway にはたらいたのではなからうか。そうであるならば、Hemingway にはやはり自在に駆使できる自分の文体を用いるほかには選択肢はなかったように思われるのである。

“Artist at Home” で注目すべきは、何と言っても、視点の問題である。物語の最初の部分では、読者は、普通の三人称全知の視点で語られていくと予測するのであるが、物語の進行に従い、この視点に変化があらわれる。三人称の無色透明な視点というよりは、むしろ、読者は、「たとえその語り手が自分の素性を明かさず、決して〔私〕などといった言葉を使わなくとも、実際に目撃している語り手にこういった一連の出来事を語られているような印象」<sup>(8)</sup>さえ

受けるようになる。ドタバタ喜劇よろしく、いささか軽薄な調子さえ漂わせながらたたまかける、得体の知れぬ、饒舌な一人称の語り手の「語り」に、読者は引き込まれていくかのような印象を受けるのである。この謎に包まれた「語り手」に関しては、物語の主人公 Howes が自分自身で語っている可能性を指摘する研究者すらいる<sup>(9)</sup>。

しかし、問題は曖昧な「語り手」の効果である。物語の冒頭部分のような一般的な三人称全知の視点で語り進めていくことは、常に登場人物との、とりわけ「作家」である Howes との距離を一定に保つだけの冷静さが作家に要求される。安易に、登場人物に対する直接的な批判を向けることは難しい。一人称の視点であれば、「語り」そのものに皮肉や当てこすり、揶揄の調子を含ませることはそれほど難しいことではない。しかし、「作家」の生活を一体どのような作中人物に語らせるのかということになれば、これまた困難な問題が生じる可能性がある。作家の内面生活までも見透かせるほどの人物を創造しなければならないからである。Faulkner としては、少々の不自然さは犠牲にしても、曖昧な「語り手」を設定する方がはるかに利点が多かったのではなかろうか。つまり、「作家」を描くにあたって最も適当な視点を設定した結果がこのような読者を幻惑させる、奇妙な「語り手」となったのであろう。

Ernest Hemingway の “The Snows of Kilimanjaro” も William Faulkner の “Artist at Home” も、ともに作家が「作家」を描いた作品として読むとき、読者にとっては興味深い諸相を見せてくれる。“Artist at Home” の精緻な分析の中で、Hans H. Skei が「人生と芸術の間に横たわる距離」<sup>(10)</sup>と表現したように、とりわけこの二作は、作家の創作活動と作家の現実生活の関わりの諸相を読者に提示してくれる。作家の創作への意欲と意思、想像力といったものが、如何に微妙に現実の社会の中での日々の生活の営みと絡み合っているのかをこの二篇の短篇は示している。また、作家が「作家」を描く場合、作家の意識が複雑に揺れ動き、その「揺れ」が作品の構造にまで深い影を落としている可能性が十分にあることをこれらの短篇は窺わせるものでもある。

このような作家の意識の複雑な「揺れ」の背後に、度重なる離婚と新たなる恋愛を経て、不況に続く混乱の社会、文学の左翼化と対峙しながら、自らの文学の軌跡を振り返り、今後の文学を模索した Hemingway が見え隠れするし、紆余曲折の末に Estelle と結婚したものの、逼迫した経済状態に悩まされ、苦渋の序文を付した Sanctuary を出版した Faulkner をふと認める思いがするのである。

## 注

- (1) Judith Wittenberg, *Faulkner: The Transfiguration of Biography* (Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1979), p. 89.
- (2) Ernest Hemingway, *The First Forty-Nine Stories* (London: Jonathan Cape, 1968), p. 59-60. 以降この版からの引用は SK の記号の後に頁数を記す。
- (3) 物語全体の基調からすれば Harry と Helen の関係は明らかに夫婦であるが、二人が結婚していることを明確に示す箇所は見当たらない。
- (4) William Faulkner, *The Collected Stories of William Faulkner* (New York: Random House, 1950), p. 627. 以降この版からの引用は CS の記号の後に頁数を記す。
- (5) Philip Young, *Ernest Hemingway* (New York: Rinehart, 1952), pp. 49-50.
- (6) Earl Rovit and Gerry Brenner, *Ernest Hemingway* (Boston: Twayne Publishers, 1986), p. 181. Rovit も、Hemingway が、Harry が単に考えるだけでなく実際に書いていたことを意識的に強調している点に触れている。
- (7) *Ibid.*, 19.
- (8) James Ferguson, *Faulkner's Short Fiction* (Knoxville: The University of Tennessee Press, 1991), p. 115.
- (9) Joseph Reed, *Faulkner's Narrative* (New Haven: Yale University Press, 1972), pp. 41-42.
- (10) Hans H. Skei, *William Faulkner: The Novelists as Short Story Writer* (Oslo: Universitetsforlaget, 1985), p. 153.